二人という時間に慣れて二十年　食卓の位置歯ブラシの位置　田中拓也

子供がない夫婦をうたった歌がこの前に四首あって、本作がおかれている。前から読んでくると、さり気ないこの作の下句がしんと心にひびく。佳作と思う。

星の字のつく病院ゆ夫戻る宇宙飛行士のやうな顔して　花美月

今月の他の作から推測して、三週間ほどいつもとは別の病院に出張勤務した夫が帰ってきた場面のようである。日本の病院ではなく外国の病院なのかもしれない。「星の字のつく病院」からの連想で「宇宙飛行士（アストロノート）」が出てくるアイディアが楽しいし、ユーモアも味わえる。

三通のメール送れば三通の返信来たる収穫のごと　北川秀子

結句が見どころ。「……ごと」とあって、収穫ではないのに、あたかも収穫のように思われる、の意味が強くひびく。収穫ならば、増えて三通以上なければならないはず。そういえば、最近は収穫の喜びを味わうことが少ないなあ、と日常が反照される。

毎日のように宅急便がくる隣の妻と交わすあいさつ　藤島秀憲

どんな職業の人なのだろう？　昔とちがって、お互いのプライバシーに踏みこまないのが、今の都市住民の約束事。挨拶以上には踏みこまない人間関係を当たり前に思ってしまう自分が、ふと照らし出されたとまどいが読

短歌の現在

No.406　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

める。

製造部技術部管理部一斉に倉庫へ向かう棚卸しの朝　青山仁

最近、職場の歌、職業の歌が少なくなっているのが残念である。たぶん、どこの職場もみな同じように机の上にパソコンがあって、かわりばえがしなくなってしまったからだろう。ここは、棚卸しの日という特別な日に取材して、いつもとはちがう緊張と活気をうたう。漢字を多くして、堅い雰囲気を出して成功した。

遥かなる道の始まり日輪の移る彼方に開かれし門　清水あかね

今月の一連では他にも「傍らに船休ませて石橋のやはらかき弧は真夜の鐘聞く」等、秀歌が見られる。どこのか場面は明らかにされていないが、この歌から、シルクロードを西へ行く出発点の西安かと思われる。古代の道をスケール大きくうたって印象深い。

猿の顔見分け的確に名を呼べる職員を子はうつとり仰ぐ　大口玲子

下句のユーモラスな表現、ユーモラスなだけではなく、なるほどそうだろうな、とうなずきたくなる。子供をうたった名歌の多い木下利玄の作を思い出す。今月の作は、子供と高崎山の猿を見に行ったときの一連。

人間のおびえを書くのが上手いからシェイクスピアは勇者描けり　森祐希子

勇者とおびえ、刺激的な主題をうまく作品化していて